

# 亡き父比呂志の命日をおえて

中島博孝

労務者渡世34号を送っていただきありがとうございます。ご返りました。「死者銘々伝」をはじめ、興味深い記事がいっぱいで、読者の誰かが書いていたように「雑誌まるごと食べられる」ようで、楽しく、また胸に何かを突きつけられるように読みました。

とりわけ「比呂志さん見たよ」と題した記事にはハッとさせられました。Oさんという方の記憶にある父—ハーモニカを吹き、シートピースを吹いていた父がよく再現されていて、また写真の父の姿もなつかしく、幾度となく繰り返し読んで読みました。

でありながら故人に関すること一切に口をつぐむ命日。いったり何のために京都にまで来て、何のために法事を営んだのか分かったものではありません。

時間さえ許せば、ぜひまたそちらを訪ねて、久保さんや水野さん、それに色々お世話をしていただいていたからまたお会いしていたいな。寺島さんに、会って話をしたかったです。何の気持ちももっていかないつまらない命日に終日つきあわされて、ところどころ訪ねられなかったのが残念ではありません。毒にも薬にもならない床屋政談と、十年一日の如くの世間話につきあわされているくらいだったら、早目に切り上げておけば良かったと悔んでいます。Oさん、とあったのは釜日の方でしょ。

ちょうどこの六月は父の死んだ月。おそろしく編集委員の皆さんも、そのことを心に留めておいてくださったのだと思うと、本当にありがたい気持ちになりました。

実は、六月二十一日が父の命日で、—皮肉と云えば皮肉なこと、この日が官製「父の日」であるわけですが—京都に法事にまわりました。三、四人の親戚が集まってくれて寺で供養してもらったのですが、多少センチに云えば、死してなお鞭打たれるというのでしょいか、ところどころ命日の間、亡父のことは一切誰の口の端にもぼりませんでした。つまり、釜ヶ崎で横死したような男のことにについては黙殺するというのがです。

しかし、なんと奇妙なものか。故人の命日、

か。亡父の喫っていた煙草の銘柄までおぼえて下さっている方なので、父も交情をいただいていたのだと思います。Oさんともお会いして、お話をきくだけでもまかせていただきたかったです。今にして本当に残念ではありません。また機会もあると思いますので、今度お会いしたらぜひ色々お話をまかせていただきたらと思います。—略—

それにしても、「労務者渡世」を誌

むたびに様々なことを考えさせられます。日本資本主義の経済構造の特質を示す言葉として一般によく二重構造と云われますが、そんなものじゃなく、もっと徹底的な垂直分業に規定された多重構造とでも云うべき極限的な構造を考えます。独占企業とその企業内労働

者、中企業とその企業内労働者、零細企業とその企業内労働者、そしてさらにその下がゴッソと続くといった風な……。労働の組織もそのつた個別資本の水準に見合ったものでしかありません。労働組合の言葉で云えば本工主義、正社員主義と云うのでしようが、最近の「平和と民主主義」のなれの果ての様を見るにつけ、中流幻想のすさまじさを思わずにはいられません。釜ヶ崎も九州も遠くとするところだ城内平和とでも云うべき現状の突破と、国内外の「オース世界」との合流なくして労働運動なり階級闘争なりの革命的再生はありえないとの念をますます強めていきます。そこで、そのような未来への展望がはるけく遠くと同じく、過去もまた深く、暗

りように思えます。とき父が持てる力のすべてをふり絞って闘ったに違いない全駐労の闘争なり戦後労働運動の総体が、いまだその正当な継承がなされなのまま、歴史の闇に横たわっているようです。私にとって「労働者渡世」を読むことは、そのつた「戦後」の闇に横たわるなものかを、目をこらして発見するということなのかもしれません。筆が滑りすぎたようです。とにかく、本日に34号を送っていただけてありがとうございました。ただ人が集まり酒を飲んだだけの命日と違って、このオオサカな雑誌のことこそ、とき父も心から喜んでいらっしゃるに違いない。これからも「労働者渡世」を送っていただきます。いいと思います。

# 明日は死ぬ人の様に

中島博

明日は死ぬ人のように  
私はあせる……。  
残された時間が  
いくらも無いと気付くとき  
人は何を考えるのだろうか？

生れて  
社会にいくらも寄附できず  
消えて行くところのは  
さびしいと思いませんか？

五十の声を聞いて

私に残ったものは  
悔恨だらけ……。  
でも泥の中に せめて  
小さな花が咲くことを  
私は ひそやかに祈るのです。

戦後の繁栄  
GNPの蔭に  
散って行く  
物云わぬ 不特定多数……。

あゝ 神さま  
彼らに恵みを与えてや、て下さい。  
私達の兄であり  
父親たちであったかも知れない

哀れな年だった。アングの魂の上に

せめて、安らかな死を、與えてやって下さい。

か弱い私には、彼らの魂をこづめる

方法も知りません。

もし死後の世界があるものだとしたら、

どうか彼等を、やさらかに眠らせて

やってあげて下さい。

一九七七年二月

釜の冬は厳しく

そして、私は依然として無力なのです。

(渡世三十一号 七七年六月)

そして 依然 私達は無力か

渡世の古く号をめぐって、いるうちに、比呂

志さんの詩をみつけた。おそろしく、たまはく

の手伝いをして、いる間に書かれたものだろう。

昨年十二月二十五日から今年の一月一五日まで

いつになくマメに越冬に顔を出した。フトン敷

き、パトロール、飯場斗争、モチつき、三ヶ日に

はおにぎりもにぎった。

私達は無力ではない、カンパを出した多くの

仲間、身体を動かした仲間、支援の人々、キ

リスト者、それぞれに力を出した。

だが、その力は弱い。新倉宮駅東隣のドヤ

の前で行路病死者を発見したのはパトロール

開始前、急救車で病院へ運んだが十分後に死

んだ仲間を見つけたのはフトン敷を敷き始めた

直後、その他に二名の死者をパトロールで発

見している。あ、神さま!!